

あるかぎり参れり、御車寄に西園寺中納言公重さぶらひ給、上は御かうぶりに尋常の御直衣、指貫ひあやの御衣一重たてまつれり、○中御供には内侍の三位殿、大納言、小宰相など、男には行房の中將、忠顯少將ばかりつかうまつる、おのがじ、宮この名残ども云盡しがたし、六波羅よりの御送りの武士、さならでも名あるつは物ども千葉介貞胤をはじめとして、おぼえことなる限り十人えらびたてまつる、○中六波羅より七條を西へ、大宮を南へをれて、東寺の門前に御車をさへらる、どばかり御念誦あるべし、○中君も御簾少しかきやりて、このもかのも御覽と渡しつゝ、御目とまらぬ草木もあるまじかめり、岩木ならねば、武士の鎧の袖ども、まほれげにぞみゆる、都のこずゑを、かくるゝまで御覽とおくるも、猶夢かと覺ゆ、鳥羽殿におはしましつきて、御よそひあらため、破子などまゐらせけれど、氣色ばかりにてまかづ、是より御輿にたてまつれば、どまらるべき御前どもの、むなしき御車をなくくゝやりかへるとて、くれまどひたるけしき、いと堪がたげなり、○中出雲の國やすきの津といふ所より、御舟にたてまつる、大船二十四艘、小舟どもはしに數えらす付たり、○中彼嶋におはしましつぎぬ、○中海づらよりは少し入たる國分寺といふ寺を、よろしきさまにとりはらひて、おはしまし所に定む、

〔皇年代略記 後醍醐〕正慶二年○元弘三年癸酉閏二月二十四日、密出御隱州、幸伯州、大山寺、六十五月日、出彼寺赴御帝都、六月五日丁卯、還幸二條富小路殿、

〔増鏡十七月草の花〕かの嶋岐○隱には、○中然るべき時の至れるにや、御垣守に侍らふつはものども、御けしきをほの心えて、なびきつかうまつらんと思ひ心つきにければ、さるべき限りかたらひ合せて、同じ月の廿四日、○元弘三年閏二月の明ぼのに、いみじくたばかりて、かくるへるて奉る、いとあやしげなるあまの釣舟のさまに見せて、夜深き空のくらまぎれにおし出すしも、霧いみじうふりて行先もみえず、いかさまならんとあやうけれど、御心をしづめて念じ給ふに、思ふ方の風さへ